

4月4日（土）と5日（日）にチャイナ展の最初のイベントが開催されました。

4日は美術評論家の費大为（フェイ・ダウェイ）さんの講演会と、フェイさんに国立国際美術館の建畠館長、当館の牧野館長を交えてのシンポジウムでした。フェイさんの講演では、伝統芸術、学院主義（アカデミズム）、現代芸術が三つ巴になっている現代中国美術の状況を図式化して見せてくれるなど、素人にもわかりやすいようにお話していただきました。続くシンポジウムでは、両館長からの質問に答えるかたちで、フェイさんから30年代と80年代とのつながり、都会と地方などについて興味深いお話が聞けました。



フェイさん講演会



シンポジウム 右から建畠館長、フェイさん、牧野館長

5日は出品作家の孫原（スン・ユアン）さんのアーティストトークと、同じく出品作家の張培力（ジャン・ペイリー）さん、楊振中（ヤン・ジェンジョン）さんらによるシンポジウムを行いました。スン・ユアンさんは自身のパソコンの画像データをプロジェクターで写しながら、これまで作ってきた作品について説明してくれました。スンさんのパソコンと美術館のプロジェクターとの接続がうまくいかず、動画を二つ（犬を使った作品と虎を使った作品）見せられなかったのが残念そうでした。「死体派」として知られたスンさんですが、トークでは刺激の強い作品はあえて写さず、かなり自制してくれたようです。



スンさんのアーティストトーク

脂肪吸引しているところ



体脂肪を塗りこめた柱

続くシンポジウムで「メディア・アート」をテーマにしたのは、ジャン・ペイリーさんが中国のビデオ・アートのパイオニア、ヤン・ジェンジョンさんは映像作家だからです。この展覧会でメディア・アートの分野を担当した国立新美術館の長屋さんと文化情報センターで映像担当をしている越後谷さんにパネリス

トに加わっていただき、中国のメディア・アートの現状などを作家たちから聞き出してもらいました。



シンポジウム 右からジャンさん、ヤンさん、長屋さん、越後谷さん（切れています）

同様のイベントは、先行の国立新美術館や国立国際美術館でも開催しており、名古屋では聴講者がどれくらい集まるのか心配していましたが、先行館に劣らないくらい多くの人に聴講していただきホッとしました。

おまけ

ジャン・ペイリーさんは、コワモテのがっしりとした体格なので近づきたい雰囲気ですが、実は気さくな人で、開会式で作家代表として挨拶もしてくれましたし（二言三言でよいと頼んでいたのですが、本格的な挨拶でした）、シンポジウムでも大いに発言してくれました。

ゴールデンウィークには、第2弾のイベントとして映画「胡同のひまわり」の上映会がありますのでお楽しみに！

(H.F.)